

オプション教材ネコヤナギ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

渡り鳥は毎年、同じ巣にもどつてくるといわれています。これまでの標識調査などによると、実際、同じ巣にもどつてくる例はたくさん報告されています。何百キロ、何千キロという長い距離を飛んで、また同じ場所にもどつてくるのですから、彼らはよほど正確な地図をもっているといわねばなりません。それと同時に渡りの方向を知るためのとびきり正確なコンパス（ら針盤）をもっていることになりました。

彼らはいつたいていとして、飛んでゆく方向を知ることができるのでしょうか。そして、どうして目的の場所を知ることができるのでしょうか。

古くから人々の間では、渡り鳥は、経験のある年老いた鳥につられて飛んでいる、といわれていました。まだ若い鳥や経験の少ない鳥は渡りのコースをよく知らないのです。年をとった鳥を先頭にして、飛んでゆくというのです。たしかに、ガンやカモが飛ぶときは、一列にならんだり、くの字になったりして、いかにも先頭の鳥がリーダーのように見えます。

でも、この鳥は、必ずしもリーダーの年老いた鳥ではないことがわかってきました。

また、先頭を飛ぶ鳥は、たびたびいれかわっていることが観察されています。しかも、まったく渡りを経験したことがないはずの若鳥ばかりで飛んでいることもあるのです。これについて、ドイツのシュッツという学者はおもしろい実験を試みました。

シュッツは、まだ渡りを経験したことのない若鳥をぜんぜん見知らぬ土地につれていって、はなしてみようとしたのです。

この実験には、シュバシコウというコウノトリのなかまが使われました。シュバシコウはドイツでは繁殖していますが、イギリスではまったく繁殖していません。シュッツは、渡りの時期がくると、この鳥をわざわざイギリスまで運んではなして見ました。本当の渡りのコースからはずれた、まったく見知らぬ土地からはなされた若鳥たちは、いったいどうしたでしょう。

若鳥たちはみごとに渡りの行動をおこないました。知らない土地からでも、彼らは渡りに出発したのです。ただし、本当の渡りのコースを飛んだのではありません。ちようど、ドイツとイギリスが離れている分だけ、平行にずれて飛んだのです。いつてみれば平行移動です。若鳥たちの飛んでゆく方向も、そして、飛ぶ距離も本来の渡りと同じでした。でも、本当の渡りのコースとは平行にずれたコースを飛んでしまったのです。

この実験から、渡り鳥のおもしろい性格がわかります。渡り鳥は、渡りのコースを生まれつき知っているわけではありません。Aを出発し、Bをとおり、Cに着くという渡りのコースは知りません。でも、どの方向に、どのくらい飛べばいいかは知っているのです。

シュッツの実験は、その後、多くの研究者によつてたしかめられています。ほとんどの場合、見知らぬ場所につれていかれた若鳥は、平行移動の渡りをおこないます。そして、おもしろいことに、彼らはそのいつわりのコースで、毎年、渡りをおこなうことです。本来の渡りのコースとははずれたところで、新しい渡りのコースができるというわけです。

ただ、平行移動の渡りをするのは、まだ渡りをしたことのない若鳥の場合だけです。一度でも渡りを経験した鳥は、こんな行動はとりません。すでに渡りを知っている鳥が見知らぬ場所につれていかれたとすると、彼らは渡りをはじめようとはせず、まず、今まで住んでいた繁殖地にもどろうとするのだそうです。

ここにも、わたしたちにはよくわからない渡りのふしぎがあります。

渡り鳥は何かにつっぱられるようにある方向に飛びはじめ、そして、一定の距離を飛ぶと、ぴたりと、飛ぶのをやめてしまします。こんなことは自然のふしぎというほかありません。でも彼らはいったい、どうやって飛んでいく方向を知なのでしょう。どんな方法で渡りの方向を決めるのでしょうか。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

これについては、以前から、さまざまなことがいわれていました。鳥たちは体の中に磁石じしやくのような器官をもっており、それによって飛ぶ方向を知るのだという意見がありました。たしかに、磁石じしやくさえあれば、方向を知るのは簡単かんたんです。また、鳥たちは、太陽を見て方向を知るのではないか、という意見もありました。これもありそうなことです。誰だれでも知っているように、太陽は東から出て西に沈みしずます。そして、わたしたちの住んでいる北半球では、太陽のとおりの道は天の南側にあります。ひよつとしたら、鳥だって、このくらいのことには知っているかもしれません。

（倉橋和彦「渡り鳥」かずひこ わたどり）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



一九四九年、西ドイツのクラマーという動物学者は、渡り鳥と太陽の關係について、ちよつとかわつた実験をしました。

当時、渡り鳥をつかまえカゴの中に飼つておくと、ちようど渡りの季節になると、鳥たちはソワソワと落ちつかなくなり、カゴから飛びだしてしまふようなほど活動的になることが知られていました。しかも、このような鳥たちは、カゴの中にいても、おもしろいことに本来渡つてゆく方向に頭を向けているのです。

クラマーは、渡り鳥のこんな性格を利用しました。彼はまず、ちよつとかわつた鳥カゴを用意しました。鳥カゴといってもドラム缶のようなもので、天井も側面も全部ふさがれています。底は透明になつており、クラマーはカゴの下にもぐりこんで、下から観察します。彼は鳥カゴの側面に六つの窓をあけ、一羽の鳥を中のとまり木に置きました。鳥は六つの窓からだけ外が見られるというわけです。ただ、窓はずつと高いところにつくられていたので、鳥は空を見ることができませんが、そのほかの景色はまったく見ることができませんでした。もし、鳥が景色を見て方向を決めたなら、何の意味もなくなってしまうからです。

実験には、ホシムクドリという鳥が使われました。ホシムクドリは、ヨーロッパとアフリカの間を行き来する渡り鳥です。渡りの季節になると、とても活動的になることで知られています。クラマーはまず、晴れた日とくもりの日で、ホシムクドリの行動にちがひがあるかどうか見てみました。太陽がでていない日とでていない日で、どんなちがひがあるかを見てみようというわけです。

さて、カゴの底にもぐりこんで、一〇秒ごとに鳥が頭を向ける方向を記録してゆくと、クラマーはおもしろい結果をえました。ホシムクドリは、晴れた日には、ほぼ渡りの方向ばかりに頭を向けているのに、くもつている日には、ある決まつた方向に頭を向けるのではなく、まるで困つたように六つの窓それぞれに頭を向けるのです。いかにも方向がわからずにあちこち迷っているみたいです。

これは太陽が何か關係していると思わないではいられません。太陽がでていない日には、渡りの方向がわかりますが、くもりの日にはそれができないのだと思えるのです。クラマーはさらに実験をつづけました。

実は、この鳥カゴには、特別なくふうがしてありました。というのは、六つの窓それぞれに反射鏡をとりつけ、太陽光線の向きが自由に換えられるようになっていたのです。ホシムクドリには、反射鏡でまげられた光がほんものの太陽の光に思えます。

実験はもちろん、晴れた日におこなわれました。渡りに出発したくてウズウズしているホシムクドリは、やはり渡りの方向に頭を向けています。さて、太陽光線の向きが換えられると、ホシムクドリはどうするでしょう。

クラマーはいよいよ、鳥カゴの六つの窓の反射鏡をとりつけ、光の向きを変えました。彼は、太陽の光がちようど九〇度まげられるように反射鏡をセツトしました。そして、またカゴの底にもぐりこんで観察しました。すると、ホシムクドリはなんと光の向きにあわせ、ちようど九〇度回転した方向に頭を向けていました。ホシムクドリは、はいつてくる光にあわせ、みごとに向きを変えたのです。

さらに、太陽の光を反射鏡で反対方向に九〇度まげても、ホシムクドリはそれとおりに向きを変えました。ホシムクドリにとつては、窓からはいつてくる光だけがたよりです。彼らは太陽の光を目じるにして方向を決めていたのです。

(倉橋和彦「渡り鳥」)



「はじめのニュースで、『故〇〇さん』とお伝えしましたが、たいへん失礼いたしました。これは誤りで、〇〇さんはご生存で、元氣でご活やくでした。おわびして訂正させていただきます。これでニュースの時間を終わります。」

これはテレビニュースの時間におじさんが実際に聞いた話で、しかもこのようなアナウンスを耳にしたのは一度や二度ではない。最初にふ報を聞いたときにはがく然とし、数分後に訂正を聞いたときにはあ然とした。私はたまたまニュースの時間わくの最後までつき合っていたから訂正が間に合ったようなものの、もし途中でテレビを消してしまっていたらどんなことになっただろう。「たいへん失礼いたしました」だけでは、その人はしばらく生き返れないかもしれない。

ある日ある時に「同時性」をもつて放送することがテレビの最大の持ちようであるとすれば、それは「一回こっきり」ということでもある。ほんものと同じ「ある日ある時」は二度と存在しない。テレビが私たちを強引に引きつけるのは潜在的にこの意識があるからである。ビデオに録画しておいていつかゆつくり見ようということではよいはずなのだが、深夜とか旅行中だからどうしても、という場合を除いては、私たちはそうしようとは思わない。ビデオはなんとなく本物と思えないところがある。

ところで、テレビ人形劇の初期の大傑作「ひよっこりひよたん島」の作者でもあった作家の井上ひさし氏はこう述べている。

「テレビの条件である『（テレビ）放映の一回こっきり性』は、一回こっきりだからこそ最善のものを放映すべきであるという激しい決意を制作側にもたらすであろう、ともかんがえられた。」「一回こっきりだから最善をつくそうという気になるというのは、どうやらわたしの机上の空論のようだった。放送の仕事にたずさわってみると、『一回こっきりだから、間に合いさえすればよい』という処世訓の方がずっと実際のなのであった。」「たとえば、しめ切りに間に合わなくなると、ディレクターたちは『なんでもいいから書いて持ってきたさい。』と電話口でさげんだ。」「そのなんで

もいいものを見せられた若い人たちがこそ災難だったのではないか。」「笑い」の作家として、テレビが世の中の「おもしろいもの」を手当たりしだいに風化していく乱暴をなげく前提として語っているのだが、テレビが進むべき方向をなお真けんに模さくしていた七三年のときにしてすでにこう見ぬいている。

この「一回こっきり」が良く作用するか、悪く作用するかである。冒頭のおわびと訂正のように、テレビのまちがいにはあ然とさせられることがしばしばあるが、常識的にはこの場合には「悪く」作用しているとしたか考えられない。テロップの文字の誤りにいたっては日常茶飯事だ。私たちが直接指てきしなければ、訂正もおわびもせずにできれば見すごしたいという気配すらある。ニュースで殺された人が、めいわくをこうむったからといってテレビ局を非難しようものなら、大人げない、わきまえない人よと世間から笑われるのが落ちである。

しかし、この軽さがまたテレビの気のおけないところでもある。「テレビとはそういうもの」という親しみをいつそう持ちようづけている。しゅん間しゅん間に消えて行く画（え）と音、そのしゅん間にこだわつてはいけない。このことがテレビのわかりやすさの大きな要因でもある。

（中略）

テレビマンは「われわれは時間との勝負にかけている」と格好よく見えをはるが、私たちはそれがかくれみのや言いわけにならないように監視しなければならぬ。要は、私たちがテレビ的社会的無責任性を今後もかんげいするか、あるいは責任をどこまでも形にしてしつように追い求める活字的社会にこだわるかにかかわっているようである。

（佐藤二雄「テレビとのつきあい方」）



ぼんゴロ二つをだしただけで、ぼくらはアオたちを無得点におさえ、なんなく一回表をおえた。てんで気をよくしちやったぼくらは、いきおいにのって攻撃にうつった。

「小細工よりも、じやかすか、かつとばしなさい。むこうのボールは、内角低めをねらってるだけだから、バットを短めに持つてあわせていくのよ。」

キリコがしんけんな目つきで、ぼくらに作戦をあたえてくれる。いまじやキリコはぼくらの監督けんコーチで、ぼくらに負けないくらい試合に身を入れてくれるんだ。こいつはいつそうぼくらははりきらせ

た。試合は五回戦だけど、やつらもなかなかねばる。それに四回戦になると、暑さのせい、ジックのボールのスピードがおちた。こいつをばちばちひっぱたかれて、二塁打一つ、三塁打二つを取られちまつた。得点はハ－六と、まだリードしてたけど、ジックはすつかりくさり、くさったところへ、アオのやつが、みんなをあおりたててやじりはじめた。ジックは完全にダウンだ。コントロールまでみだれちゃつて、暴投を二度もやり、四球やエラーを続出させた。

どうにか守備陣がそれをカバーして、とにかく四回の表はおわらせただけど、結果はさんたんたるもので、ハ－十とひどい逆転をやられちまつた。

ベンチにもどると、ジックはグローブを力いっぱい地面にたたきつけた。

「おれは、もう、野球をやめた！」

そうとう頭にきちやったらしくて、ぼくやキリコがいくらなだめても、ますますかつかつしちやうばかりなんだ。ぼくもすぐ頭にきちやうほうだけど、ジックのはちよつと特別製なんだ。

ミツコやデッコが、景気づけのために、みんなをリードして、いせいのいい歌をうたってくれたりしたけど、ぼくらはしよぼくれちまつて、戦意もだんだん遠のいてくんだ。

「おどろいた子たちね。わたしがいつもいつてるでしょ。『勝ち』

『負け』で、なんでもわりきつちやおうとするから、そんなことにな

キリコはバッターに立つ者ひとりひとりのしりを、大きな手で、ぴしやぴしやひっぱたいは元気づけた。が走者、一、三塁のチャンスもむなし、無得点におわつちまつた。

まだふてくされているジックをとりまいて、守備につく気にもなれず、ぼくらは、タイムを要求して、ぶらぶらしていた。

六組のきたないやじは、ますますさかんになってくる。ミツコやデッコたちが、負けずにやりかえすのだけど、それもなんだかしだいにいきがさがる。ぼくも最初のうちは、みんなとどなりしていったんだけど、ジックのがんこさにあきれ、ジックにはらをたてた。

「じゃあ、おまえは、この試合を不戦敗にしようってのかい。」

ぼくはジックをにらみつけた。けど、ジックのやつグローブをひっぱたくばかりで、さつきからなにもいわないんだ。

ピッチャーはジックしかいないから、ぼくらはもうどうしようもないんだ。ほかのやつに投げさせれば、もつともつとわるい結果になるのはわかりきっている。それでここんところは、どんなことしたって、なんとかジックに投げてもらわなければならぬ。とぼくは決心した。

「あ、あのサブちゃん——。」

そのとき、おずおず横のほうから、ぼくに話しかけたやつがいた。

「なんだ。うるさいな。」

ふりむいてぼくはそいつをにらみつけた。すつかりいらいらしてたんだな。

立っていたのは金井だった。みんながなにごとかというふう

に、金井のまわりに集まってきた。さじを投げたように、遠くのベンチからぼくらをながめていたキリコも、立ちあがってこつちを見てる。

「ぼくに、投げさせて、みてよ。」

ひとつひとつのことばを、くぎるように、金井ははつきりいった。

「なんだって！」

ぼくはじぶんの耳をうたがった。もやしうまれかわりみたい

にひよろひよろして、おまけに、いままですって野球をするのなんか見たこともないやつなんだから、それもむりないというもんだ。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ところが金井のやつ、よっぱど心をきめてるらしく、もいちどはつきり、

「ぼくに投手をやらせてよ。」

といったんだ。ぼくは思わずわらつちまった。でも、金井の顔は真剣なんだ。奥歯をぎゅつとかみしめて、まともにぼくを見つめるようにあつとうされて、ぼくらはだまりこんじまった。

「よし！」と、ぼくは金井の上氣した顔にむかっていた。「投げてみる。」

みんながざわめいた。ベンチにいたジックが、なにかいいえそうだったけど、ぼくはかまわずみんなにかたを組ませ、「いくぞっ！」とさけんだ。みんなもさけんだ。ぼくらは七度さけんだ。ミツコやデッコたちみんながかん声をあげ、拍手し、ぼくらははげました。ジックがベンチでそわそわしてた。キリコがぼくらにウインクを送つてよこした。

金井はファーストミットを取った。

「おまえはピッチャーをやるんだろ。」

と、ぼくはすこしあきれていった。みんながわらつた。

「これを使いなれてるんだ、ごめんよ。」

金井はわらい、それから、ベンチに取り残されたようにすわり、しりをもぞもぞ動かしているジックのところにかけていった。

「いっしょうけんめい投げてみるから、そのあいだにちょうしをなおしといてよね。」

金井はそれだけいいおわると、ひどくはづかしいことをしたかのよう

に走つてマウンドにのぼった。

ぼくら九人は顔を見あわせ、ちよつとくちびるをかんてわらつた。やれるとぼくらは思った。そうさ、六組になんか、負けてたまるもん

か！ ぼくは、ジックにしかめつつらを作つておどけてみせ、みんな

といっしょに、声をだしあいながらポジションについた。

金井は左だった。うまいというほどではなかったけど、コントロールがきいたから、左だというだけで、けつこう六組の攻撃をおさえることができた。それでもその回で二点入れられた。

スコアは八-十二だ。だけど、それぐらいはもの数ではなかった。やる氣じゆうぶんのいま、四点ぐらい、なんなくとりもどせると思えた。自信は前からあつたんだ。ただ、くさつちまつて、やる氣をなくしてただけなのさ。

「お天気屋さんたち、がんばるのよ。野球は最終回の裏からよ。」

キリコは金井の頭に手をおいて、ぼくらをはげました。

金井はジックにむかつて、

「打つほうはてんでだめだから。」

と、バッターをゆずった。ジックだって、いつまでもぐずぐずしてるやつじゃない。

「すまん。」と、金井を見ていい、「さつきはわるかつたな。」と、ぼくらにいった。ぼくらはジックをひやかしてわらつた。

「ほんとに、ありがと。」と、ジックはもいちど金井にいった。

金井はまっかになつてうつむき、しきりと二点入れられたことを氣

にした。ぼくらは金井のせなかやかたや、頭をたたき、「氣にするな。」「ドンマイ。」「ドンマイ。」

といった。クラスのみんなが、いせいのいい歌をうたう中で五回の裏、ぼくらは最後の攻撃をかけた。

(後藤竜二「天使で大地はいっぱいだ」)



子供の頃の私は、ものすごく内気で引つ込み思案、何事にも消極的で、胸の中で考えていることがおよそ行動にあらわれず、オドオド、ウジウジしていた。現在の私と知りあった友人達は、まず信じられないが、間違いなくかわいそうなほどおとなしい子だった。(中略)

このまま、ずっと大きくなっていくなんてあまりにつまらない。自分自身を変えてしまえば、こういう状態から抜け出せるのにと子供心に感じていた。

「こんな子じやイヤだ!」と思い続けてはいても、一度出来上がってしまった周りの状況も、持つて生まれた性格も、そうそう簡単には変えられるものではない。相も変わらぬ内気な表皮の下に、変わりたい、変わりたいという願望が吹き出し口をみつけれないままたまりにたまっていった。

それが、思いがけず一気に爆発したのは、忘れもしない小学校三年の正月、三学期が始まって少したった朝だった。その年の正月に父を亡くし、忌引でしばらく休んでいた私はその朝、いつにも増して不安な面持ちで学校に向かった。深呼吸をしてやっと教室の戸を開けたというのに、私の席だったところに何と見知らぬ女の子が座っている。きつと都会からの転校生なのだろう。垢抜けしたかわいい子だった。ランドセルを背負って突っ立ったまま鼻の奥がツーンと痛くなるのを感じていた。遠巻きにしたクラスの子達も、私自身でさえこれ以上は何も起こらず、やがて先生が来ておしまいになると思っていた。

「何でここに座っているの?」

「だって先生が言ったんだもの。ここの子しばらく休むからってさ」

こぼすまいと思っていた涙が、胸の中でグラグラ煮えたって、吹き上がった気がした。

「そうかい。じゃ、私は帰らせてもらうわ」

あつけにとられていたクラスメートをぐるりと見回し、バタンと勢いをつけて戸を閉めると、その足で職員室に向かい、先生に

無期限登校拒否を宣言した。先生は悪気があったわけではなかったと思う。きつと、あの子なら大丈夫だろうと考えていたのだろう。でも私はたつた今、あの子であることをやめた。

ついさつき来た道を家に戻る時、ほんの少し前のちよつと背を丸めた自分とは、まるで違う自分が歩いているようで、景色まで変わってみえた。

たつた一人のストは、確か一週間かそこらで学校から先生方がやってきて話し合い、納得して終了した。再び、以前と同じように登校したが、もう私自身は以前のようではなかったし、友人の私を見る目も変わった。

こんな自分じやイヤだと幼心に思い始めてから、その思いを自分の血肉にするまでずいぶん長い年月を要したことになる。自分自身を生まれ変わらせる、自分の生き方を変革するといった、自らの核に関わることを、自らの意志で動かすというのは、結構しんどい。後が続かなければ、さらにズルツと深みにはまりかねないし、さあ変わらねばと頭から指示が来るようでは、機がまだ熟していないのかもしれない。

私がとつさにとつてしまった行動は、もちろん、おつ、今が変身のチャンスだと考えてのことではない。周囲をも、自分をもびつくり仰天させた出来事は、あの時、私のもつとも自然な反応になっていたのである。

ただ困ったことに、母はその時の私の内面的変化をキャッチしそこなかった。

母は、それ以来、私の表面的変化にため息をつき続けている。

「まさかこの子が……」と絶句し、もういい加減年になった娘をつかまえていまだに「こんな子じやなかったのに」と嘆いている。

こんな子に大変身した私のフォッサマグナは、小学三年、九歳の冬にくつきり横たわっている。

(吉永みち子「九歳の冬」)



「お前はどうも本好きでいかん」

父親は剣道何段かのスポーツマンで、毎朝、私を雪のなかに引っぱり出しては竹刀を持たせて切り返したの、素振りだのをやらせるのである。

私は、決して本だけが好きな弱々しい少年ではなかった。むしろ、英雄や冒険物語の主人公にあこがれ、忍術の真似をして屋根から飛びおたり、喧嘩で額を割られたり、水泳や分列行進が好きだったたりする活発な子供だったとおもう。

だが、両親はいずれにせよ、私が活字を読むことを好まなかった。彼らは私を余り物を考えず、直情で健康な、竹を割ったような男の子に仕立てあげたがつていたのだという気がする。しかし、私にとつて、活字を通じて自分の空想の世界に遊ぶことは、生きるということと同じ位、本質的なことのように感じられた。

私はくのらくろ>やく冒険ダン吉>を、かなり幼い時に卒業し、小学生の上級になると、両親の本棚にある実に雑多な本を、ほとんど目を通してしまっていた。

<小島の春>だとか、<もめん随筆>だとか、<放浪記>だとかいった本は、たぶん母親の蔵書だったにちがいない。私はそんな本が面白くて仕方がなかったが、一方では、学校の仲間から借りて読む、山中峯太郎や佐藤紅緑の世界にも熱中していた。佐々木邦のユーモア小説も、私の大好きな本の一つだった。江戸川乱歩や岡本綺堂なども、学校の友人から借りて読んだ。

私はかなりの距離を、市電と徒歩で通学していた。その行き帰りに、歩きながら本を読む習慣がついてしまつて、家のそばまで来ても、まだ読むのを止めるのが惜しく、もう一度、電車の駅まで歩きながら読み続けたりしたものだ。一度、私がカバンを背負つたまま、家の前から電車の停留所の方角へ本に熱中しながら逆もどりしている時、父親に出会つたことがある。

「お前、どこへ行くんだ」

父親は、学校から帰る時刻に逆に登校でもするかのような私の様子を見て、げんそうにたずねた。

「学校に筆箱を忘れてきたから取りに行こうと思つて」

と、私は言つたが、父親はなんとなく私が行き帰りに本を読むことに夢中になつてゐるのを感じたようだった。

そして、私が学校から帰つてくると、私のカバンを開け、なかに借りてきた小説本や読物のたぐいはいつてゐると、黙つて取り上げたまま返してくれなかった。

そのことで私はひどく友人たちに義理の悪い思いをしたことがある。

私はそこで自衛のために一計を案じた。帰り道に読み続けてきた本を、家のなかに持ち込まないようにするのである。冬の日など、私は読みさしの本を新聞紙にくるんで、家の生垣のあたりに積みあげられている雪のなかに突っ込んで隠しておくことにした。

そして次の朝、それを掘り出して、雪を払い新聞紙を払げて読み続けるのだ。

時には本のなかに雪が飛び込んで、それが凍てつき、ページがパリパリと音を立てたりすることもあった。

そんな時代を、いま思いおこしてみると、禁じられた読書のなんともいえない鮮烈なよろこびの記憶が、まざまざとよみがえってくる。

現在、私は活字のなかに埋れ、そしてそれを再生産する生活のなかで、義務としての読書、必要からの読書に追われているが、すでに活字が行間から立ち上ってくるような、あの少年時代の読書のよろこびからは、はるかに遠い所にいる自分を感じずにはいられない。本というものは、本来、あのようにして読むべきものではなかろうか、という気がする。

（五木寛之「地図のない旅」）



小学校の中学年の頃、僕はがき大将で毎日近所のちびっこたちを引き連れて遊び回っていた。縄張り意識が強くて、僕らは自分たちの町内をその統治下においていた、つもりだった。放課後になると、裏山に作った基地（斜面に生えた大木の枝に板切れや鉄材をくくりつけて作った掘っ建てだった。）に集まっては、攻めてくるかもしれない敵を想定して、僕らは石投げの訓練を積んでいたのだ。

はじめてあの新聞配達少年を見たのは、その基地を建設しおわった直後の頃のことである。見張りに立っていた弟が大声で僕を呼んだのだ。

「兄貴、なんか変なのが走りよう。どがんする。」

僕は弟の指さすほうを見た。肩から新聞をぶら下げた少年（多分小学校の高学年か、中学の一年生ぐらいだと思った。）が、一軒一軒の家に新聞を放り込みながら走っているのである。新聞配達の少年の存在は知っていたのだが、こうやって意識してまじまじと見るのは初めてのことであつた。彼は僕らが見守る中、背筋を伸ばしてずっと下の道を通り過ぎていつてしまったのである。

翌日も彼は同じ時刻にそこを通過していった。やはり肩から吊るしたたすきに新聞を山盛り入れて、彼は一軒一軒にそれを放り込んでいくのだ。僕はその姿に何か心を動かされていたのだが、沢山の子分たちの前で彼を褒めるわけにもいかず、つい心にもない行動をとってしまうのである。

そう、僕は彼目掛けて石を投げつけたのだ。

「皆、あいつは敵だ。敵のスパイに間違いないったい。」

小さな子供たちは僕の言うことをすぐに信じて、同じように彼目掛けて石を投げつけはじめたのだ。新聞少年は投石に気がつき、立ち止まると僕らのほうを一瞥した。しかし、石を避けようともせずじつと僕らのほうを睨みつけるのだった。幾つかの石が彼の足に

あたったが、彼は逃げようとはしなかった。
「やめ。」

それに気づいた僕はちびっこたちに石投げをやめさせた。子供たちは石を投げるのをやめ、僕の次の命令を待っていた。僕と新聞少年はそのとき初めて対峙して睨みあった。鋭い目をした強そうな男だった。僕たちが黙っているとまもなく彼は走りだすのである。

それからもときどき僕らは彼を見つけては威嚇攻撃をした。そのたびに彼は立ち止まりじつと僕らを見すえるのだった。その目は鋭くかつて見たことのない動物的なものだった。

新聞配達という行為が悪いことではなく、むしろりっぱなことであることはあの頃の僕でもちゃんと理解はしていたつもりであつた。僕だけじゃなく、弟やちびっこたちもちゃんと知っていたはずだ。なのに僕が彼に石を投げたのは、多分彼の存在が気になっていたらならのだろう。新聞を少年が配達するということが一体どういうことなのか、僕はすごく興味があつたのだ。

それから少しして、僕らが社宅の門のところであつた。と、彼が突然門の中へ走り込んできたのである。がっちりとした身体をしていて、僕より五センチは背が高かった。僕は直ぐに彼と目が合い、睨み合ってしまった。そのとき、ちびっこ一人がいつもの調子で彼に向かって石を投げつけてしまったのである。石はそれほどスピードはなかったのだが、少年の額にあたってしまった。そして少年はそのときはじめ僕らに抗議をしたのである。

「何で石ば投げるとや。俺がなんかしたとかね。」

身構えるちびっこたちを僕は慌てて制した。そして少し考えてから聞き返した。

「なんばしよつとね。」

僕は新聞のつまつたたすきを指さして聞いてみた。

「新聞配達にきまつたらうが。」

「そうやなか、なんで新聞ばくばりよつとか知れたかつたい。」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

僕は彼にぐいと睨みつけられて怯みそうだったが、ちびつこたちに示しがつかないのでじつと堪えていたのである。

「なんでつて、お金のためにきまつとうが。お金ば稼いで、家にいれるつたい。うちはお前らんとこみたいに裕福やなけんな。」

「ゆうふく？」

弟が横から口を出してきた。

「ああ、うちは貧乏やけん、長男の俺が働いてお金ば稼がんとならん」とよ。お前らみたいに遊んでるわけにはいかんつちや。」

彼のその言葉は僕の胸にびんびんと響いた。自分のことを貧乏といいきる彼がなぜか自分たちとは違う大人に見えたのだ。

「わるいけどな、これからは俺の配達のじゃまばせんどいてくれんね。もし、邪魔するようだったら、こつちも生活がかかってるけんだまつちやおかんばい。」

彼はそう言うのと石を投げつけたちびつこを押しつけて新聞を配りはじめるのだった。

僕は何故かいようなないシヨックで、それから数日考え込んでしまった。僕は昔から考え込むタイプだったようだ。あのとき僕は新聞配達の少年を実は心の何処かで尊敬していたのだと思う。自分を彼に投影しはじめていたのだ。

それから数日して僕は自宅の門のところで彼を待ち伏せすることになる。自分たちは引き連れず、僕ひとりであった。そして夕方、いつもの時間に彼は新聞を抱えて走り込んできたのである。

「よう。」

彼は僕を見つけると、そう声をかけてきた。

「今日はぞろぞろいなのか。自分たちは。」

僕は大きく頷いた。

「今日はちよつとさしで話があるつたい。」

「なんね。」

新聞少年は眉間をぎゅつと引き締めて僕の顔をまじまじと覗き込んだ。僕は唾を呑み込んだ。

「実はあれから真剣にかんがえたつちやけど。俺も新聞配達やらしてくれんかとおもうてさ。」

新聞少年の顔がほころんだ。

「君がや。」

僕は真剣な顔つきで頷いた。

「だめやろか。」

新聞少年は首を振る。

「いいや、でもお前が考えているよりずっと大変なことたい。そんな途中で投げださんで続ける自信があるつちゆうなら、話をつけてやつてもよかたい。ただな、いい加減な気持ちでやるとやつたら、俺がゆるさんけんね。」

僕は彼にはじめて微笑んだのである。

そしてその日の夕方、僕は彼に連れられて近くの新聞の集配所に行ったのである。初めての経験で僕はすっかり緊張していた。集配所は活気があつて沢山の少年たちで溢れていた。みんなたくましく真つ直ぐの目をした連中ばかりであった。僕は彼に仕事の段取りを説明されながら暫くその場を観察していたのである。それから僕は彼に紹介されたそのボスにお辞儀をした。ボスは笑顔のたえない人で、一言、がんばるんだと言っただけだった。しかし、その言葉はかつてどんな大人たちが僕にかけてくれた言葉よりずっと僕を大人として扱ってくれるものだった。そして僕は次の週頭から新聞を配ることになったのである。僕が自分で決めた初めてのアルバイトであった。

しかし、結論からいえば、僕は次の週頭から新聞を配ることはなかったのである。その晩、僕は食事の席で両親にその事を、やや自慢するように言っただが、突然、父親に怒鳴られてしまうのだ。

「俺はお前にそんな苦労をかけさせているのか。貧しい思いをさせているのか。」

母は黙っていた。僕は褒められるだろうと思っていたので、父の

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67

32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01 00

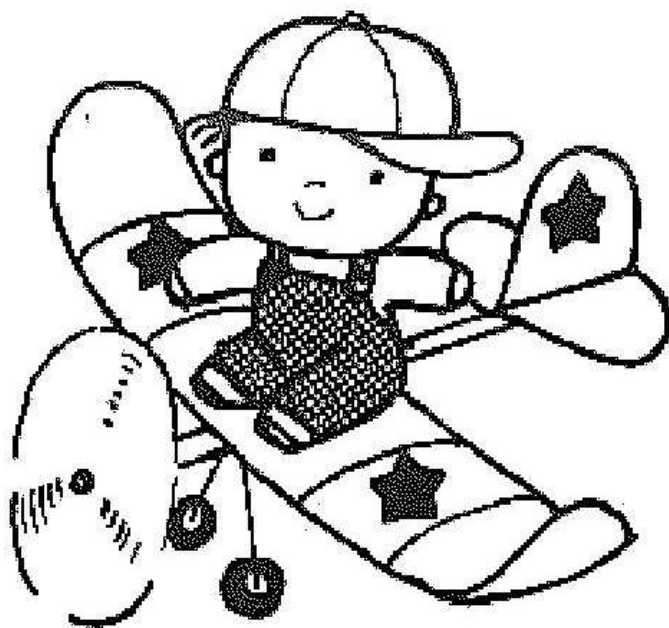
怒鳴り声は予想外の出来事だったのだ。何時だったか勤労少年のド
キュメンタリーテレビをみながら父が目頭を濡らしていたのを僕は見
て知っていたから、彼のその行動はまったく理解することができな
かったのである。そして余りの剣幕に僕は逆らうこともできなかった。
た。

結局、僕の母が次の日新聞の集配所に出向き、僕の初めてのアルバ
イトは夢と消えることとなった。父は体面を気にしたんだ、と僕は後
で考えた。新聞を背負わせて小さな子供を働かせていると、同じ社宅
の人たちに何と思われるか分からなかったからだろう。同じ社宅
の。そして僕は次の日から新聞配達の少年をさけるようになるのであ
る。

(辻仁成「新聞少年の歌」)



65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33



「飽和化市場」という言葉がある。いろいろな商品の普及率がもう限界のところまできている消費市場をあらわす言葉だ。たいていのものはひととおり行きわたった、という状態である。

飽和化市場の特徴は、いままでもつていた製品から新しいものに買いかえていく需要は多いが、市場全体が成長していく力はもう限界のところまできている、という点だ。

そのため、売り手側としても、いままでと同じような売り方では商品が売れない。そこで、それぞれ独自の商品を開発したり、新しい売り方を考えたり、これまでとはちがった分野へ進出したりと、あらゆる手を試みる。ここまでに紹介した販売方法の工夫だとか、競合商品にはない独自の機能やデザインの開発などといったことも、こうした市場があふれている。

たとえばモノ。すでに述べたように、ヘッドホン・ステレオ一つ取りあげても、似かよった商品がたくさんメーカーから発売されている。たくさん商品のなかから、きみは一つの商品を選んで購入するわけだ。そのためにカタログを取りよせたり、お店の人の話を聞いたりして情報を集め、比較した上で決める。

つまり、きみの前には、とてもたくさんさんのメニューがあり、そこからある一つを選択するというわけだ。

サービスという商品を購入する場合も同じだ。

外食の代表といえるファースト・フード。あるチェーン店で新しいハンバーガーが登場したと思ったら、すぐに別のチェーン店にも似たようなメニューがつけ加えられる。もちろん、「一味ちがった」商品としてだ。

ここでもきみは、さまざまなお店のさまざまなメニューのなかから一つのサービスを購入するための選択をすることになる。

新しい商品やサービスが市場にでるまでには、売り手側の「商品差別化戦略」がおこなわれている。消費者側の情報を得るための調査、その情報をすぐに利用できるように蓄積したデータベースの作成、テレビやイベントをとおしての宣伝・広告・商品を効率よく

く売するための仕掛けなど、売り手側の努力はこれまでみてきたとおりだ。

だから、きみは、売り手側の商品差別化戦略という大きな「仕掛け」をいかくぐつて、たくさんさんのメニューから一つを決め、選択するのである。これは、とてもたいへんなことなのだ。

たしかにメニューはたくさんある。だが、それは、メニューがいまほど多くなかったときにくらべて、よりよい選択ができるということなのだろうか？

ちがいをうたつて登場した商品は、すぐに似た商品が登場することで、ちがいの部分がなくなってしまう。きみの「ステイタス」にふさわしいはずの独自の商品が、すぐにその独自性を失ってしまう。イチゴっこみみたいなもので、ちがいはますます細分化し、たいした意味をもたなくなってくる。

たいした意味のない「ちがいがい」を選ぶためにたくさんの商品が用意されているのが、はたしてほんとうに豊かなことなのだろうか。わたしたちは、そんな「幸せ」を求めてきたのだろうか。何度でも自問してみよう。

おびただしい商品にかこまれて毎日暮らしているわたしたち。わたしたちが生活することⅡ消費することである。住宅、家具、食品、衣服、電気製品、新聞、書籍、日用雑貨といったモノから、電気、ガス、交通手段をはじめとするサービス財まで、日々消費しつづけているのだ。

そのわたしたちの多様な消費が、ふたたび多様な生産を促す。

そして新しく生産された生産物が、消費者であるわたしたちに、また新たな欲望をひきおこす。

こうして生産と消費が循環しながらふくらんでいくのである。しかも、売り手と買い手のどちらも、先がみえていないときているのだ。

こうした生産と消費のくりかえしのなかで、地球資源は減少をづけ、生産にともなう排出物や消費生活からでる廃棄物などによって、環境汚染がすすんでいる。それも、地球的な規模でおこ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

っているのである。

気をつけなくてはいけないのは、地球環境を汚染しているのは、生産をしている企業側だけではない、ということだ。汚染に責任があるのは、買い手であるわたしたちも同じだ。生産をささえている消費者側の責任も大きい。

つまり、わたしたちは他人とのちがいを示すために地球資源をつかい、環境汚染物質を排出しつづけている可能性をもっているわけだ。もしそうだとしたら、わたしたちは、自分たちの消費のあり方そのものを問いなおさなくてはいけない。

たとえば、わたしたち日本人がふだん食べているエビ。日本人のエビ消費は、この三十年間に六倍以上になり、売り上げは一兆円をこえたそう。世界最大のエビ消費国だ。そのほとんどは東南アジアからの輸入によっている。エビの稚魚は、東南アジア各地にひろがる広大なマングローブの沼地で育っており、そのエビを捕獲するために大型船もはいっている。そのためエビ資源はしだいに少なくなり、マングローブの沼地も荒らされているのだそう。

日本人が直接荒らしまわっていないにしても、わたしたちのエビ消費が、結果としてマングローブを枯らすことになっているのは否定できない。

これは一つの例であって、わたしたちの生活が、このように間接的に環境を破壊していることは、じつに多い。わたしたちがおびただしい消費を重ねることが、考えてもみないようなところに悪影響をあたえ、傷つけることになっているわけだ。

そうした直接みえない他人や世界へ、どこまで想像力をはたらかせることができるかが、これからますます問われることになるだろう。もちろんこれは大人だけの問題としてでなく、きみたち一人一人がこれから考えなければならぬ問題だと思う。

(児玉裕「あなたは買わされている」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



学校で先生は「あなたの意見は？」というでしょう。お化粧ひとつにしても、洋服ひとつにしても、流行を追うのはおろかですよ、自分にあつたお化粧をしないさい、自分にあつた服を着なさい、自分がたいせつですよと先生はいうでしょう。

しかし会社でみると、みんな自分というものを中心にするのではなく、会社に、みんなに、あわせようという具合になるのがふつうです。

だが、このような事なかれ主義、個性のなさだけでよいでしょう。か。世の中を良くしようとする人は、しばしば異端の考えの持ち主の中から生まれるのではないのでしょうか。一例をあげましょう。

アメリカの自動車会社、GMの小型車コルベアは、しばしば事故をおこしました。車が高速でまがるとき、うしろが浮きあがり、まがりきらず事故をおこすのです。やがて、この車には設計上のまちがいがあり、その原因は、少しでも安くしようとして材料を節約した点に問題があることが指摘されました。このことは、この車をつくっている人、したがってこの車をよく知っている従業員の間で、さらに多くの人が事故にあつたでしょう。だが、こうした指摘が従業員からでないような会社だったらどうなるでしょう。

日本では、おなじようなことをいった従業員に、「そんなことをいうのは会社を批判すること、われわれの敵だ」という目が会社の中から生まれ、現に、自動車会社にいらなくなつたすぐれた技術者がいます。

会社のためよりもっと重要なことがあつたとき、会社第一と考え、ほんとうのことをいわず、かくしやしい——こうしたゆがみが日本の会社にはないでしょうか。

このような日本的な社会の中にいる人間は、それに合うようなことばを使います。みなさんの使っている日本語と、学校でならう英語とをくらべてごらんない。英語は文章のいちばんはじめに、なにがきますか。主語がきます。「私が」とか「あなたが」というのがきます。なにかをするその責任の所在は、まず「I」なり「Y

ou」なり、はつきり主語として、いちばんはじめにでてくるのが特徴です。

そのつぎに、その問題に賛成なのか反対なのか、イエスカノーかというのがあります。ですから英語を聞くと、はじめのところを聞いていると、だれがどういう意思をもっているかがだいたいわかります。しかし、日本語はそうではありません。たいてい主語がないでしょう。そして、イエスカノーかというのはまえにきません。文章のいちばん最後にくるのです。

会議のときなど話をしていううちに、みなが反対だなということが顔色でわかると「……」というような考えもあるんだが、まずいですねエ」なんて、きゆうに方向転換することができるとばです。

つまり、相手とちがう考えをだすことはたいへん失礼だし、おたがいの関係をまずくする。なにしろ大部屋のなかにいつしよに住んでいるのですから。

そこで、相手と自分がおなじような考えになるようにし、相手も傷つけない、自分との関係もひびがはいらない——そういうようにもっていく習慣や考え方が、ことばの構造の中にもはいってくるのです。賛成か反対かをいちばん最後にもっていくという、世界にも珍しい日本語がこうした習慣に対応しているのです。

中国語だって英語とおなじことばの構造で、賛成か反対を示すことばが主語のつぎにきます。日本語は主語がはつきりしません。責任の所在をまずなくし、賛成か反対かをいちばん最後につけて、どうにでもかえられるということばの構造になっています。

ですから、問題がおこつたときどうするかというと「私は自分の責任をよくよく考えて、こういう結論に達しました」ということはしないのです。なにが正しいか、なにが正しいか、それよりもみんなはどう考へるであろうかを考へるといふのが多くの日本人です。そして顔色を見ながら、いつでも方向転換できるようにすることばの構造をさぐりながら、最後でみんなが一致するようにもっていく。これです。ボスといわれている人間はこれをやるのです。

佐藤栄作という、ひじょうに長く総理大臣をつとめた人がいま

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

す。この人は、自分で決定を下すことがなかったといわれています。「他からすすめられた形をとりたい」

これが佐藤さんの名文句と伝えられています。自分できめたら自分が責任をとらなければなりません。それは団結をみだすことになりません。なぜなら、反対意見の人がいるかもしれないからです。

ある事件がおこった。みな意見がどうせん対立する。しかしボスは自分の意見をいわない。いえ、反対の人を敵にまわすことになる。そこでなすがままにまかせる。たとえば、外国との貿易で、一ドルが三百六十円であつたのを三百円にするか、それとも三百六十円のままかという問題です。佐藤さんはきめないのです。世界経済は一九七一年八月十五日から混乱し、この問題で大さわぎになったとき、軽井沢に逃げてしまったのです。東京にいれば、首相として自分がきめ、自分が責任をとらなければならないからです。

現実はどうです。とうとう反対もなにもあつたものではなく、三百四十円、三百二十円と動いてしまいました。もうやむをえない、これを認めるより道がないという、そういうところまで追いこまれて、みんなの意見がまとまり、さあそうするかというところまで待つて佐藤さんは山をおり、これを認めました。したがって反対はおりません。これが、佐藤さんが日本でいちばん長い年月総理大臣をつとめた秘訣だといわれています。

もしまちがっていたならば、みんながきめたのですから、一億総ざんげ、けつして佐藤さんの責任にならないのです。

しかし、佐藤さんのような行動をしていると、なにもないときはいいのですけれど、重大な問題がおこったとき、それにたいして、はやく手をうち、事態を危険のない方向にもっていくことができるのです。

だれが戦争をするということをきめたかわからないうちに、いつの間にか中国との戦いがはじまり、ずるずる拡大し、日本はあの敗戦を経験したのではないのでしょうか。そして、戦争の責任というこ

とになると、みんなが悪かつたのだといって、だれも昔のあやまちを反省しようとしません。

したがって日本の社会のくさつた部分、悪い部分、それを切り取ることもできませんでした。おなじ戦争をし、敗れたドイツは、まったくちがいます。戦争をひきおこした責任者がいたのです。ヒットラーを中心とするナチスです。したがってその責任を追及し、くさつた病の部分を取りのぞく。いまもってドイツはこのナチスの協力者を裁く裁判所をもっているのです。だから新しく生まれかわることができたのです。

日本は、いつまでたつても仲良しクラブの中で、責任もはつきりせず、病もはつきりせず、くさつた部分をそのままにしながら、みんなをくみながら動いている。これでいいのでしょうか。

小学校や中学校の先生は、自分の意見をいいたくないとみなさんにいったでしょう。それは、こういう病を取りのぞくことができるような人間に、みなさんをしていと思つているからにちがいません。

(伊東光晴「君たちの生きる社会」)



子どもたちの好きな昔話に「王様の耳はロバの耳」というお話がある。どういうわけかロバのような耳をした王様がいた。それが知られるのが嫌でいつも帽子をかむっていた。ただ、床屋にはそれがバレてしまうので、床屋に散髪してもらったたびにその床屋を殺していた。とうとう、ある床屋があまりにも助命を願うので、「秘密を守る」ことを約束させて帰らせてやった。ところが、その床屋は秘密を守っているうちに変な病気になるってしまう。占師が彼に対して、その病いは言いたいことを言わずにいるためのものだから、誰にも聞かれないようにして町のはずれの柳の木に向って、言いたいことを言えばよい、と教えてくれる。

そこで床屋は柳の木に向って、「王様の耳はロバの耳、王様の耳はロバの耳」と話すと、病気はすぐに治ってしまった。ところが、その後、風が吹いて柳の木が揺れる度に、「王様の耳はロバの耳」と鳴りはじめたので、国中の人が王様の耳の秘密を知ってしまった。王様はそれを聞いて、皆に知られてしまったのなら仕方がないと帽子をぬいでしまわれた。ところが、国民はむしろそのような王様を尊敬して、「ロバの耳の王様」として敬愛するようになった、というお話である。

子どもたちは、この話のなかで「王様の耳はロバの耳」という面白い繰り返しを何度も楽しみなが、彼らにとっても大変重要な「秘密」ということと深く関連するものとして、興味をもつて聞くようである。確かに、この話は秘密の機微について多くのことを教えてくれる。まず、秘密を守っていて病気になるた床屋のこと。これは秘密を守ることの辛さや難しさを端的に示している。秘密は身体内に進入してきた異物のように、外に排除しないとたまらないときがある。

人間の心はある程度のまとまりをもって存在している。多くの場合、秘密はそのまとまりを壊しそうなものであることが多い。王様を尊敬することと、王様がロバの耳をもっていることは簡単には両

立し難い。それに、王様がロバの耳だということは、凄いニュースバリューももっている。床屋がしゃべりたくなるのも無理はない。そして、それを辛抱し続けることは身体の病気をさえ引き起してしまうのである。

王様にとって「ロバの耳」は運命によって与えられ、いかんともし難い欠陥であった。彼にとって出来ることは、あらゆる手段を講じてそれを隠して通すことであつた。そのためには、殺人ということも避けられなかった。王の犯した多くの「殺人」は、彼が秘密を守るために、どれほど多くの「感情を殺し」、「人間関係を殺し」てきたか、と考えると了解しやすいだろう。実際、われわれは自分の欠点を隠すために、どれほど多くのことを殺すことだろう。

ついにながら、殺されるのが床屋というのも面白い。床屋は髪型を変えるという意味で、「人格の変化」との関連で夢や物語によく現われる。王は自分の欠点を隠すことに固執して、自分の人格の変化のチャンスを見殺しにしていたのである。

ところで、ある床屋の嘆願に王は心を動かされ、殺すのをやめる。誰かの心情に動かされることは、何か意味あることが行われるきっかけとなることが多い。王はそれまで殺してきた自分の感情に取て身をゆだねることを決意した、ということが出来る。王はその後、自分の隠したい秘密が国中に広がっていることを知ったとき、すぐに床屋を罰することをせず、その経緯を知って、それが「柳の木のおき」によって広まったことを知った。人間がいかに努力をしても、「自然」の力には抗し難いときがある。そのことを知った王は、自然の力の前に文字どおり「脱帽」したのである。

王のこのような態度に接して、国民は王の隠したがっていた欠点を知ったにもかかわらず、前よりも王を敬愛するようになった、という点が大切である。人間は自分の大きな欠点が他人に知られたと

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

しても、必ずしもそれによって他から軽蔑けいべつされるとは限かぎっていないのである。国民が「ロバの耳の王様」と言いって敬愛けいあいしたということは、王の欠点がかえって国民の親愛じんあいの情を引き出す通路となつてゐる、とさえ言えるのである。

欠点を知られること、秘密ひみつを知られることなどは、必ずしも軽蔑けいべつされるきっかけとはならないし、むしろ逆さかのことさえ生じるのであるが、「ロバの耳の王様」の話が示唆しさするように、そのようなことが生じるためには、それにふさわしい努力や、時の熟じゅくすることなどの要素ようそが必要ひつやうなことを忘れてはならない。

（河合隼雄「子どもの宇宙」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



文明人は時計によって時間を測る。それによって、一日は二十四時間に正確に区切られ、共通の時間が設定される。これは多くの人間が社会をつくっていくためには、非常に大切なことである。これによって、われわれは友人と待ち合わせもできるし、学校も会社も、同一時刻に一齐に始めることもできる。時計の発明によって、人類はどれほど時間が節約できるようになったかわからない、本当に便利なことだ。

ところで幼児たちは、大人のもつ時計によって区切られた時間とは異なる時間を生きているようだ。「きのう」とか「あした」とかの意味も、はつきりしていない子もある。「また、あしたにしようね」などと言っている子も、それは厳密に あした ということをさすのではなく、「近い将来」を意味していることも多い。

あるいは、何かに熱中していたが、何かで中断しなければならなくなつたとき、「また、あしたにしよう」と言うのは、このことを言うことによつて、中断することを自らに納得させようとする意味あいで言っている子もある。この場合の「あした」は、二十四時間の経過後に存在する時期などではなく、断念しなければならぬという気持ちと、何か希望を残しておきたいような気持ちの交錯した現在の状況をのべている表現なのである。

道くさをしたために叱られる幼児たちが、悪かつたという気持ちをあらわしながら、何とも納得のいきかねる表情をしていることがよくある。彼らも叱られながら、「おくれてしまった」「おそくなつて悪かつた」ということはよくわかつていたのである。しかし、なぜおそくなつたのだろう。「ぼくは何もしてなかつたのに」、「ちよつとだけ、おたまじやくしを見てただけなのに」と思っているのである。たしかに子どもたちは「ちよつとだけ」何かをしていたのである。しかし、残念なことに、それは大人のもっている時計では「一時間」も道くさを食つていたことになるのだ。

おたまじやくしを見ていた子どもが、一時間を「ちよつとの間」と思つたように、われわれ大人でも、同じ一時間を、長く感じたり短く感じたりする。時計の上では一時間であっても、経験するもの

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

にとつては、その一時間の厚みが異なるように感じられるのである。もちろん、時間そのものには厚みなどあるはずがないから、あくまで、それを経験するものの主観として、厚みが生じてくるのだ。

何かひとつのことに熱中していると、時間が早くたつていくことは誰もが知っていることである。といつても、何かひとつのことをしていると、必ず充実した時間を過ごしたことになるとは限らない。たとえば、テレビのドラマなどを見るともなく見ていると、ついひきこまれて終わりまで見てしまう。終わってみるといつの間にか一時間たつてしまつてゐる。しかし、このあとでは充実感よりも空虚な感じを味わうことだつてある。時間は早くたつたと感じられるが、その厚みの方はうすく感じられるのである。

あるいは、ひとつのことをしていても時間が長く感じられるときもある。その一番典型的な場合は、「待つてゐる」時間である。誰かが来るのを待つてゐるとき、われわれはなかなか他のことができない。そわそわしながら待つ。しかもその間は随分と長く感じられるのである。「待つ」ということだけをしているのだが、時間を長く感じてしまう。

これらのことを考えると、自分のしていることに、その主体性がどのように関係しているかにしたがつて、時間の厚みが異なつてくるらしいと思われる。「待つ」ことは、受動的なことである。その人がいつ来るかは、その人の行動にまかされているわけで待つてゐる方としては、ただそれにしたがつて待つより仕方がないのである。これはテレビの場合でも同様である。テレビを見終わつて充実感のない場合は、私たちがテレビを見たのではなく、テレビが私たちをひきこんでしまつたのである。私たちは受動的に見ていたのだ。

子どもがテレビを見すぎることはよく問題になる。たしかにテレビを見すぎることは、子どもが「与えられた映像」を受動的に楽しむことによつて、主体的な時間をもたなくなる点に危険性が存在している。しかし、テレビの主体的な見方だつてあるはずである。怪獣にしろ、チャンバラにしろ、子どもにとつては必ず経験しな

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ければならない世界なのである。だから、それを見たいときには「主
体的」に十分に見させることがいいのではないか。主体的にテレビを
見させるといことは、子どもの「見たいままに放任する」ことでは
ない。放任の中から主体性は出てこない。

テレビは見たいが勉強はどうするのか、父親は野球が見たいが子供
は漫画が見たい。これをどう解決するか。食事中にテレビを見ないの
はわが家のおきてである。ところが、食事時間にどうしても見たい番
組ができた。これをどうするか。

これらの葛藤と対決していくことによってこそ主体性が得られる。
対決を通じて獲得した時間、それは主体性の関与するものとして、「
厚み」をもった時間の体験となるのである。

(河合隼雄「子どもの『時間』体験」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



ぼくは子どものころ、弱虫だったので、どちらかというと、いじめられる側だった。それでも、ぼくよりもつとにいた子にたいして、いじめなかつたかという、そうも言いきれない。いま考えると、そのぼくは、とてもみじめだ。

たとえば、近所に鬼がわらのような顔の子がいて、「鬼の子」とはやして、いじめたことがあった。そこへ、その子の母親が涙を流して飛びだしてきたとき、まったくびっくりした。いじめている側は、ことの重要さを理解していないことが多い。

いじめている人間が、強いわけではない。抑圧されている人間は、いじめの相手を探しがちなものだ。上級生が下級生をいじめる学校は、たいてい管理がきびしい。クラブだって、リベラル（自由主義的）な雰囲気のあるところだと、上級生も下級生も友だちづきあっている。いじめている人間はたいてい、体制によつていじめられている、弱い人間なのだ。強ければ、弱い者いじめなんか、する必要がない。

ときには、だれかをいじめているという、加害意識のないことも多い。その集団が、いじめを作っている。いじめられるほうにしてみれば、そのほうがつらい。罪の意識なしに悪いことをするほど、困ったことはない。

それでも、やがて、もしもまともに成長すれば、そのときの自分が、こうした状況に強制されて、罪の意識なしに、だれかをいじめていた事実がつか。たいてい、そのときには、もう過去をとりもどすことができない。しかも、その自分は、そうした状況のなかで、弱くみじめで、その弱さゆえに、そんなことをしていたことがわかる。

こうした、みじめな気持ちを持つようには、ならぬほうがよい。いじめられている子もみじめだろうが、あとになって考えてみると、いじめたほうだって、それに劣らず、みじめなものだ。

とくにこのごろ、一種の村八分みたいな、いじめ方があるらしい。彼もしくは彼女が、存在しないように扱う。顔を合わさず、声をかわさず、存在自体を無視してしまう。これは、一種の精神的殺

人である。暴走よりも、万引きよりも、もつとひどい、最大級の非行だと思ふ。

ときに、いじめの計画者がいないことさえある。集団自体が、いじめ存在になる。ちよつと怪談じみたこわさがある。こうしたとき、みんな普通の中学生で、だれも、いじめているという意識のないことがある。これは、なおこわい。いじめていないつもりで、いじめてしまっている、このこわさの感覚は、怪談の感覚である。

ときには、いじめられている子までが、それを意識していないこともある。こうなると、最高にこわい。意識していなくても、いじめは存在している。意識にのぼらない魂の底で、一種の夢魔の世界で、だれかがだれかをいじめている。

（中略）

中学生の間で、いじめが増えているというのを、悪い子がいるからだとは、ぼくは思わない。いじめつこも、たいていは、普通の子だと思ふ。いまの中学生の状況が、そうした弱い部分を作っているのだと思ふ。

それでも、もしきみが、よく考えてみて、だれかをいじめていたら、すぐにやめたほうがよい。あとでかならず、それはきみにとつて、とてもみじめな思いになる。相手にたいしてだけでなく、きみ自身の未来のために、すぐにやめたほうがよい。

だれかをいじめたくなるには、きみのおかれている空気があろう。それはわかる。でも、そのために、だれかをいじめるとしたら、それはきみの弱さだ。人間というものは、弱いもので、ぼくは人間の弱さを、むしろいとおしむほうだが、この場合だけは、いや、この場合こそ、きみに強くなつてほしい。

やる気を出せとか、根性でがんばれとか、そんな声にのつかつて、強くなれというのは、ぼくの趣味ではない。それより、どんな状況にしろ、状況に負けて、他人をいじめることで心のバランスをとつたりしないような、自分自身の心の強さがほしい。

（森毅「まちがったつていいじゃないか」）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集1番「渡り鳥は毎年」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昔、渡り鳥は経験のある年老いた鳥につられて飛んでいると思われていた。
B 渡り鳥は、生まれたときから渡りのコースを知っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「渡り鳥は毎年」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 渡り鳥の先頭を飛ぶ鳥は、経験のある年老いた鳥であることが多い。
B 未知の場所につれていかれた若鳥は、今まで住んでいた繁殖地に戻ろうとはしない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集1番「渡り鳥は毎年」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 渡り鳥の先頭を飛ぶ鳥が入れかわるのは、先頭を飛び続けると疲れるからである。
B 渡り鳥の群れには、多くの場合、経験のある年老いた鳥がいる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集1番「渡り鳥は毎年」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 渡り鳥は、一定の距離を飛ぶと、もうそこで飛ぶのをやめてしまう。
B すでに渡りを知っている鳥が未知の場所につれていかれると、これまで住んでいた地にもどろうとする。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「はじめてのニュースで」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

最初に井上ひさし氏が考えた『(テレビ)放映の一回こっきり性』とは何でしょう。

本文の内容に合うものを一つ選んで番号で答えなさい。

- 1 一回こっきりだから、間に合いさえすればよいという処世訓
2 一回こっきりだからこそ最善のものを放映すべきであるという激しい決意
3 一回こっきりだから、瞬間的に笑いを取る必要があるという意見

問6 読解マラソン集3番「はじめてのニュースで」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

本文の内容に合うものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。

- 1 テロップの文字の誤りは、「一回こっきり」が悪く作用した例である。
2 テロップの文字の誤りは、私たちが指摘しなければ、訂正もおわびもされない。
3 テロップの文字の誤りは、「テレビとはそういうもの」なので、しかたがないので気にしないことだ。

問7 読解マラソン集4番「ぼんゴロ二つを」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 金井の決心のかたい様子を圧倒されて、ぼくらは何も言えなくなった。
B ジックよりもコントロールのきく金井が投手になったから、ぼくらはやれると思った。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「ぼんゴロ二つを」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 金井は、うまいというほどではなかったが、気力で相手を2点におさえた。
B ジックは、自分のとった行動を反省したようだった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「子供の頃の私は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「帰らせてもらおうわ」と言って、ほんとうに帰ってしまった行為を、私は少し後悔した。
B 母は、変身前の「わたし」を好ましく思っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「子供の頃の私は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「私はたった今、あの子であることをやめた」の「あの子」とは、転校生のことである。
B 転校生が来たとき、私は変身のチャンスであると思った。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「お前は どうも本好きで」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 活字を通じて空想の世界に遊ぶことは、作者にとって苦しい日常の息抜きのようなものであった。
B 作者が「義理の悪い思い」をしたのは、友人たちに借りた本を返せなくなったからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「お前は どうも本好きで」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 現在の私は、子供のころよりも楽しく本を読めるようになっている。
B 本は、本来、道の行き帰りなどに読むべきものである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「小学校の中学年の頃」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 僕は、昔から新聞配達の仕事というものを尊敬していた。
B 父は、子供が新聞配達をしていると、自分の家が貧乏なので働かせていると思われると思った。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「小学校の中学年の頃」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 彼がお金のために新聞配達をしていると知った次の日、僕は、すぐに自分も新聞配達をしようと思った。
B 僕が新聞配達の少年を避けるようになったのは、新聞配達が苦しくて途中でやめてしまったからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「『飽和化市場』という」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「飽和化」されていない市場とは、新たにその商品を買おうとする人がたくさんいる市場である。
B 地球環境を汚染しているのは、消費者ではなく、小さな「ちがい」を作り出して物を売ろうとしている生産者である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「『飽和化市場』という」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「商品差別化戦略」をおこなう生産者によって、消費者はますます貧しくなっている。
B 私たちの消費生活が、環境破壊に間接的に手を貸していることも多い。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「学校で先生は」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■周囲や社会に合わせる日本人の習性は、日本語の特徴にも表れている。
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「学校で先生は」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■問題が起きたときにみんなが望む最善の方法をとろうとするのは日本の長所だ。
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「子どもたちの好きな昔話に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■精神力があれば秘密を隠すことができる。
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「子どもたちの好きな昔話に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■欠点は必ずしも軽蔑の対象になるものではない。
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「文明人は時計に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■時計で区切られた時間は子どもにこそ必要だ。
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「文明人は時計に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■何かに熱中していると時間が経つのが早く感じられるが、それは充実した時間を過ごしているからだ。
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「ぼくは子どものころ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■人をいじめる人は強い人間なのではなく、弱いからこそそうした行為をする。
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「ぼくは子どものころ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■いじめをする方とされる方の両者が意識して初めていじめは存在する。
1 ○ 2 ×

1～3月

小1コード：naneパ ス：	小2コード：naneパ ス：	小3コード：naneパ ス：
小4コード：naneパ ス：	小5コード：naneパ ス：	小6コード：naneパ ス：
中1コード：naneパ ス：	中2コード：naneパ ス：	中3コード：naneパ ス：
高1コード：naneパ ス：	高2コード：naneパ ス：	高3コード：naneパ ス：